都会の夜の屋上で②～私の彼氏がモテすぎる……瑠理の嫉妬編～
【体験版】

この体験版は、製品版の冒頭を抜粋したものです。
この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

――――――――――――――――――――――――――――――

夜、突然の尿意で目が覚めた。

頭はまだ夢の残骸に絡め取られたままで、視界はぼやけ、思考もまともに回らない。それでも体は勝手に動き、寝ぼけ眼のままベッドから這い出してトイレへと向かう。用を足し、水の音が静かなマンションの夜に溶けていく。再びベッドに戻ろうとして――ふと、違和感が胸を掠めた。

人の気配。

勉強部屋の方から、微かに漂う智史の気配。息を潜め、足音を殺して扉に近づく。そっと取っ手に手をかけ、軋まないよう慎重に開けた先に、彼の姿があった。机に向かって背を丸め、分厚い参考書を睨みつけ、ペンを走らせている。深夜の、この時間に。

「……智史」

小さく、掠れた声をかけると、彼はゆっくりと顔を上げた。眼鏡の奥の瞳が、微かな驚きと優しさに揺れる。

「どうしたの、瑠理？眠れない？」

本来なら心配すべきは、こんな時刻まで机にかじりついている彼のほうなのに。優しい彼は、私のほうを案じてくれる。

「ううん。トイレで起きただけ。……コーヒーでも入れようか？」

彼は軽く首を横に振った。

「大丈夫だよ」

机の上には、分厚く開かれた参考書。ページの端が少し折れていて、何度も読み返した痕跡が残っている。私は無言で近づき、後ろからそっと両腕を回して、彼の体温に身を預

けた。シャツ越しに伝わる温もりと、微かなインクの匂い。胸の奥が、甘く疼く。

「智史……」

彼はペンを置き、振り返って私の頭を優しく撫でた。指の腹が髪を梳く感触に、力が抜けていく。

「甘えんぼめ」

笑いながら、低く囁く声。その響きだけで、夜の冷たさが遠ざかる。

「ふぅーんだ。私の特権だもん」

数分だけ、言葉を交わさず、ただその温もりに浸る。やがて私は名残惜しげに体を離し、

「勉強の邪魔しちゃってゴメンね。私、もう少し寝るね」

「うん、おやすみ」

彼は手を軽く振って、私を見送ってくれた。扉を閉じると、マンションは再び深い静寂に包まれる。寝室に戻り、布団に潜り込む。まだ教養科目の時期だというのに、ああして深夜まで机に向かう彼の姿を思うと、胸の奥が熱くなる。尊敬と、抑えきれないほどの愛情が、ぐるぐると渦巻いて――私は、その熱を抱えたまま、再び眠りへと落ちていった。

翌朝。

無事に同じ大学に合格した私たちは、今日から本格的な大学生活を始める。お互い一時限目から授業があるため、一緒に登校することにした。学部は違えど、教養科目の期間は同じキャンパスを共有できる。それだけで、朝の空気が少し柔らかく感じられた。

時間にゆとりを持ちながら、私はゆっくりと朝食を取る。リビングでは、智史がリクライニングチェアに身を預け、静かに本を読んでいる。ページをめくる音だけが、穏やかに響く。

彼は朝食を食べない。昼食もほとんど摂らない。夜、一食だけ。同居するまで、本当にこんなに食事を取らない人間がいるとは信じられなかった。ただし、ブラックコーヒーだけは欠かさない。キスをするたびに、唇に残るほろ苦い香りが、彼の中毒ぶりを物語っている。

私だけ食べるのは少し寂しいので、てきぱきと朝食を済ませ、身だしなみを整える。

「智史、もう時間だよ」

「うん、わかった」

彼も立ち上がり、身支度を始めた。私は鏡の前で化粧を施し、彼はシャワーの音を立てる。湯気が浴室から漏れ、部屋の湿度がわずかに上がる。

「いいよなぁ、男は……」

小さく愚痴をこぼす。準備が、あまりにも簡単すぎる。もしこの言葉を彼に聞かせたら、きっと平然と「じゃ、化粧しなきゃいいじゃん」と言うだろう。そして続けて、何の照れもなく――

『だって、すっぴんの瑠理の方が可愛いもん』

と、真っ直ぐに目を見て言ってくるのだ。そのストレートすぎる言葉に、苛立ちと同時に胸が熱くなってしまう自分が、少々憎らしい。

準備を終え、玄関で顔を合わせる。

「さぁ、行こうか」

「うん！」

私たちは並んでマンションを出て、電車に揺られながら大学へと向かった。

大学生活は、予想以上に楽しい。

三浪の末にやっと受験から解放された解放感が、キャンパスの空気を輝かせる。新しい友人、未知の講義、広々とした校舎――すべてが新鮮で、胸が高鳴る。

ただ……。

智史からほんの少し目を離した隙に。

「ねぇ、智史君。今日、飲み会行かない？」

甘い声が、隣から聞こえてくる。

何故か、智史はモテる。

高校時代は男子校で全くモテなかったと本人は言っていたが、大学では嘘のように違う。名門医学部にはお坊ちゃまが多いのは承知している。それでも、私という彼女がいるのに、なぜ他の女子が次々と近づいてくるのか。

原因の一端は、多分私にある。服のコーディネイトも、髪型も、すべて私が手を加えた結果だ。田舎の芋坊主が、都会の空気に馴染む男に変貌した。元々の素地が良いからこそ、見違えるほどになったのだ。

「さーとし！」

近寄る「ハエ」は、即座に排除しなければ。

「ねぇ、智史。次の講義は一緒だよね。一緒に行こ！」

「うん、いいよ。けど、飲み物だけちょっと買わせて」

「うん！」

私の声に、先ほどの女子は自然と散っていく。ほっと息を吐きながら、自販機へ向かう道すがら、彼の表情を窺った。

「智史、もしかして邪魔だった？」

「いや、有り難かった。まだ、酒も飲めないし、飲み会の空気は正直あんまり好きじゃない。助かったよ」

そう、彼はこういう男なのだ。さっき話しかけてきた子も相当可愛い顔立ちだったのに、普通の男なら鼻の下を伸ばしてついていくところを、彼は淡々と私の隣に留まる。変人、と言ってもいい。けれど、そのひたむきに医業を志す姿が、私はたまらなく好きで――一生をかけて、支えてあげようと思う。

……少し、重い女だろうか。自分でも反省しつつ、思わず溜息をつく。

「はぁ……」

「どうした？何のため息？」

「ううん、なんでもないよ。ちょっと疲れただけ」

そう取り繕っても、彼の瞳は鋭く私を捉える。

「僕から他の女の子遠ざけるのに必死？」

……当たりだ。前からやっていたし、隠しきれない。

「……」

「確かに瑠理から見たら心配に思えるかもしれないけど――俺は瑠理だけだよ」

彼は私の肩に手を置き、そっと物陰へと導く。そして、唇を重ねた。舌を絡めず、ただ優しく、確かな口づけ。短いのに、熱が胸の奥まで染み渡る。

「続きは、帰ってからね」

意地悪く笑う彼の横顔に、思わず言葉を失う。

これで、本当に高校時代モテていなかったのか？

『周りの女の子は、一体何をしていたんだよ！？』

と叫びたくなるが、彼が嘘をついているとは到底思えない。あの言葉を告げたタイミングが、あまりにも追い詰められた場だったからだ。

私が智史の初めての彼女で、初めての相手――。そう思うだけで、胸の奥がふわりと温かくなる。彼の唇も、指先も、そして身体の奥までも、すべてを私が最初に知ったという事実が、甘い独占欲をくすぐるのだ。

「あっ……そういえば」

自販機の前で、お互いの飲み物を手にしていた私たち。彼はいつものブラックコーヒー、私はレモンティー。冷たい缶の感触が掌に沁みる中、私は少しだけ声のトーンを落として切り出した。

「智史、お願いがあるの？」

「ん、何？」

コーヒーを一口含みながら、彼は穏やかに私を見る。その瞳の真っ直ぐさに、一瞬だけ

言葉が詰まった。正直、この願いは彼が好む類のものではない。わかっているからこそ、言い出すまでに何度も迷ったのだ。

「あのさ……お願いしにくいことなんだけど……」

　缶を握る指に、わずかに力がこもる。

「この前ね、久しぶりに高校の友達と連絡したの」

「うん」

　彼はコーヒーを飲みながら返事をした。

「そしたら、彼氏を紹介してほしいらしいんだよね……なんか」

「ふぅーん」

　淡々とした返事。焦った私は慌てて付け加える。

「あ！　もちろん、受験のこと全部話した上での話だよ！　だから、その……断りづらくって……」

「瑠理は行って欲しいの？」

　彼の問いに、私は一瞬だけ視線を泳がせた。悩んだ末の、本当の気持ち。

「うん……。女の子ばっかりだけど……」

「瑠理がそういうなら、行くよ」

　あっさりと、彼は頷いた。その言葉に、胸の奥がじわりと熱くなる。

「ほんと……？　ありがとう」

　彼氏を見せ物のように扱いたくはない。それでも、久しぶりに繋がった高校の友人たち。私が受験でどれほど苦しんでいたかを知っている彼女たちが、その苦しみを打開してくれた彼の姿を見たいと言ってくれる。その気持ちを、無下にはできなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――

体験版はここまでです。
お読みいただき、ありがとうございました。
続きは製品版でお楽しみください。

都会の夜の屋上で②～私の彼氏がモテすぎる……瑠理の嫉妬編～